

利上げ期待への影響で注目集まる～英・米物価統計

2018年2月12日(月)

今年の大きなテーマが、各国の金融引締めに対する動きです。
米国の緩やかな利上げサイクルを維持し、2015年12月、2016年12月に続いて
昨年は3月、6月、12月と3度の利上げを実施。
英国は昨年11月に利上げた後、当面は据え置きが続くと見られていましたが
先週の英中銀金融政策会合(MPC)では、声明の中で追加利上げ時期の前倒しに言及しており、
米、英の今後の利上げ動向が市場の注目を集める展開となっています。

そうした中、今週は利上げ決定の大きな鍵を握る物価統計の発表が予定されています。
13日に英消費者物価指数(CPI)、生産者物価指数(PPI)、小売物価指数(RPI)
14日に米消費者物価指数(CPI)、15日に米生産者物価指数(PPI)と言った具合です。

この中でも注目されているのが
英国のインフレターゲットの対象であるCPI前年比、
米国のインフレターゲットの対象であるPCEデフレーター前年比と
水準は違うものの、動きが似通っており、発表の早い米CPI前年比です。

まずは発表の早い英CPIから。
英中銀はもともと世界有数のインフレファイターのひとつとして知られていました。
(ユーロ導入前の独連銀と並ぶインフレファイターでした、
欧州はドイツなどでのハイパーインフレの歴史なから
日本や米国などと比べ、インフレに対する警戒感が強いです)
もっとも、カーニー総裁は歴代総裁の中ではかなり緩和的な姿勢が目立つこともあり
現状では利上げを急ぐ姿勢は見せていませんが、
物価がインフレターゲットを大きく超える状況に対する警戒感が残っています。

英国のCPIは昨年2月分からターゲットの2.0%を超える状況が続いており、
前々回、11月分は許容上限とされる3.0%を超える3.1%を記録。
前回12月分も3.0%と上限ぎりぎりとかかなりの高インフレを記録しています。

このような状況を受けて、8日の英中銀金融政策会合(MPC)では、
政策金利を11月時点と比べて予想期間内でやや早期にかつ一段と引き締める必要と表現。
MPC前まで約5割となっていた次回5月のスーパーサズデーでの利上げ確率は
67.3%まで上昇する展開となっています。

そうした中、今回1月分のCPI前年比の見通しは2.9%と少し下がりました。
英国は今年第1四半期のCPIを2.9%と見込んでおり、そうした予想に沿った格好です。
予想を超えて3.0%超えを見せると、早期の利上げ期待がさらに強まる可能性があり
ポンド買いもありそうです。

続いて14日の米消費者物価指数(CPI)です。
前回は前年比+2.1%、食品とエネルギーを除いたコアが+1.8%となった米CPI。
インフレターゲットの対象であるPCEデフレーターは、
代替品の扱いや住居関連費用の占める割合などからCPIよりも水準的に低く出ることが多いため
ターゲットの2.0%には届いていません。
(12月分のPCEデフレーターは1.7%、同コアは1.5%)。

もっとも、CPIコアは前月比で+0.3%と11ヶ月ぶりの高い伸びに。
好調な自動車販売の中で新車価格の上昇、
家賃の伸び、ヘルスケア費用の上昇などが見られました。

ガソリンが下がっているため、総合では11月分よりも弱かったものの
全体はまずまずという印象です。

そうした中、今回は総合が2.0%と若干伸びが低下。コアも+1.7%と鈍化見込みです。

12月に落ち込んだガソリン価格が1月は戻っているだけにその上での弱さということで、
やや警戒感が出そうです。

予想以上に落ち込みが見えると、ドル売りが広がる展開も。